

2025年度
II期入試(国際言語文化研究科)
小論文(100点 90分)

問題 次の文章を読んで、下の問いに答えなさい。

1891年に、Lafcadio Hearnは松江の近くの御津浦という漁村を訪れた。そこには旅館が一軒もなく、ある漁師の家に泊めてもらうことになったのだが、「10分もしないうちに、何百人もの群衆がその家を取り囲んだ。大人たちは半裸であったし、男の子たちは素っ裸であった。外国人を見ようと、群衆は建物の周りをぎっしりと取り囲んで、戸口に群がり、窓によじ登ったので、家の中が暗くなった」とHearnは記している。外観上明らかに差異のある見知らぬ人間に対するこの漁村の人々のナイーブな好奇心に、現代の我々は苦笑するかもしれない。しかし、今日でも、日本に住みついてかなりの日数を経過したのに、日本人から奇異の目で見られるという不満を訴える者は少なくないのである。そのことは、日本人が異文化の中で教育を受けた外国人との日常的な接触の機会が多くなるとか、異文化間コミュニケーションに上達するとかだけでは簡単に解消できない問題であろう。

これまで新聞などの様々な場で、日本人ないし日本が入るカテゴリーとして「西側」、「先進国」、「アジア」等が使われてきて、我々は西側の一員だとか、アジアの一員としての自覚が必要だとか言われてきた。しかし、果たして、日本人の意識の中で、「我々」という言葉が最大限に使われたとして、その中に、日本人以外の人々が入る余地があったのだろうか。それは極めて疑問であろう。冷戦時代に、公式の場で我々は西側の一員であると宣言されたことはあるだろうが、一般の日本人の意識において、そのような自覚などなかったのではないか。あるいは、第二次世界大戦で連合国と戦争したのだが、その当時の日本人が、同じ枢軸国のドイツやイタリアを「我々」の中に含めていたとは信じがたい。このように、日本人にとって、たとえ国際化ということが叫ばれていようと、「我々」の中に非日本人が含まれることは稀なのである。

その原因の一つは、言語や宗教から、日常的な慣習に至るまで、少なくとも表層的なレベルにおいて、日本と、日本以外で存在するものとは大変違っているからであろう。日本人ないし日本文化を“unique”とする主張に対して批判的な外国人は多いし、また、構造主義的なアプローチから、所謂ラングのレベルにおいて、世界中の言語や文化に共通するパターンが認められている。それは間違いではないとしても、我々の意識を形作るのは、むしろパロールのレベルではないだろうか。食べ物に対する好みや感情表現は、日常の経験を通して形成されていくものであろう。そういう意味で、個々の日本人が認識や情緒を共有する程度は、

2025年度
II期入試(国際言語文化研究科)
小論文(100点 90分)

日本人同志と非日本人との間では明らかな違いがあり、それが目に見えない溝と意識されるのである。従って、おのずから、複数の主体がなんらかの共有しうる領域をもっているという意識から生まれる「我々」と、その圏外に存在する人々をさす「彼ら」の境界もそれと符合することはなんら不思議ではない。

ただ、そのような「我々」と「彼ら」という構図を意識してしまうと、文化的差異から生じる溝が実際以上に深く広く感じられるようになる。ある種の同一性の意識を共有しあう「我々」とそうでない「彼ら」との構図は、それぞれのこまごまとした文化的差異を実際以上に拡大させ、あたかも本質的な違いのような錯覚を抱かせる。例えば、歴史的・文化的につながりの強かった朝鮮半島や中国ですら、この百年間に、脱亜入欧のスローガンのもとで、朝鮮半島や中国の人々を「彼ら」と意識したこと、および侵略者とその被害者という意識をもつに至ったことで、日本とそれらの国々との間の溝は修復しがたいくらい広がっている。従って日本人の場合、なんらかの共有しうる領域をもっていると意識する主体の集合は、最大限に引き伸ばしても、それは日本のもつ地理的な境界から出ないのである。

そのことは西洋から非西洋を見る時にも言えるだろうか。[…中略…]

日本は、明治以降にも宣教師の報告や旅行記によって、西洋にその姿が伝えられていたのであるが、圧倒的な情報量と共に、所謂近代的な視点からの観察は、開国以降のこととなるであろう。日本は鎖国から、ペリー提督によって開国させられるが、アメリカの強硬な態度に対する一般的な西洋の見方は非常に好意的だった。ただイギリス人の J. R. Black が、1880年に出版した *Young Japan* でそのことに触れている箇所は、非常にアンビヴァレントである。例えば彼は、開国前は「この国は全く文字どおり、子供のように話し、考え、行動するといわれたかもしれないが、今では、子供っぽい事とは縁を切った」と言っているが、他の箇所では、「ペリー提督とタウンゼンド・ハリス氏が平和裡に条約を締結したことは承認されるが、いずれの場合も、権利に対する力の勝利であった。ペリーは、おとなしい人々をおどかすのに十分な武力をもってやって来た。おとなしい人々は、いわば『あのいまましいドルを欲がる外国人によって、やむを得ず開国させられた』のだ、そしてその武力は彼らをおどかした。」と言っている。また、Black は、随所で、開国後二十年で西洋の技術をあらかた吸収したことに対する新鮮な驚きを表明していて、日本を鎖国という歴史的要因によって遅れて「国際家族」に入った国とみなし、西洋にとっての他者、つまり“one of them”という意識は希薄である。

2025年度
II期入試(国際言語文化研究科)
小論文(100点 90分)

Things Japanese で、B. H. Chamberlain は日本の日常風景から宗教・政治まで取り扱っており、またその参考文献まで記しているところから、第五版の出版された1905年までに、西洋人による日本についての研究はかなり進んでいたことが分かる。その序文で、Chamberlain は、明治期の日本の急速な西欧化に触れて、「古い日本」と「新しい日本」、つまり牧歌的な古い日本と思想・企業・巨大な科学的業績において進歩した西洋に肩を並べようとする日本との対比に言及しているが、[…中略…] 彼の記述にはオリエントという枠組みは余り感じられない。

意識的にせよ無意識にせよ、西洋とオリエントという枠組みで「日本」を作り上げようとしたのは Lafcadio Hearn であった。ヨーロッパでは、産業革命以降の急速な近代化によって生まれた歪みが、人々に牧歌的な世界に対する憧れをもたらしたが、とりわけ Hearn は、科学文明・功利主義を嫌悪し、それに対立するものとしての「日本」を *Glimpses of Unfamiliar Japan* で構築していく。しかし、Chamberlain が “he had found the Land of the Gods, and his ‘Glimpses of the Unfamiliar Japan’ glorified the Japan which he imagined he saw.” と評したように、Hearn の「日本」はオリエントの枠組みの中で美化されたものであり、急速に近代化していく日本はほとんど排除され、田園や神話や仏像のイメージで飾られた、牧歌的であり、神秘的な世界に仕立てられていく。

例えば、Hearn は、あたかも楽しいことがあったかのように微笑みながら夫の葬儀へ出ることの許しを乞い、戻ってから笑いながら骨壺を示す日本人の使用人に対する西洋人女性の戸惑いの例を挙げる。Hearn は、この微笑の意味するところは、“This you might honorably think to be an unhappy event; pray do not suffer Your Superiority to feel concern about so inferior a matter, and pardon the necessity which causes us to outrage politeness by speaking about such an affair at all.” であると解釈している。しかし、この「日本人の微笑」とそれに対する西洋人の戸惑いは、むしろ異文化間コミュニケーションにおけるテクニカルな問題ではないだろうか。聞き手の察し、あるいは気遣いを要求する文化と、そうでない文化にそれぞれ属する人間の意思伝達の失敗の例である。しかし Hearn にとっては、これは西洋人と東洋人の本質的な差異の構図として捕えようとする。そして、「日本人の微笑」は、仏像のそれへと還元され、そこに日本人の本質を見いだそうとするのだ。

2025年度
II期入試（国際言語文化研究科）
小論文（100点 90分）

出典；伊勢芳夫（1997）「“one of them”としての日本」『言葉と文化の対話』英宝社
*ただし、出題のために一部を書き換えた。

第1問

本文の内容を500字程度の日本語に要約しなさい。ただし、欧文表記等を用いる場合は1マス2字とする。

第2問

作者は異文化コミュニケーションに関し、「ある種の同一性の意識を共有しあう「我々」とそうでない「彼ら」との構図」について述べている。この点について、日本人が意識の中で、西洋またはアジアを「我々」とみる例と「彼ら」とみる例を、それぞれ1つずつ具体的に挙げながら、異文化間コミュニケーションについて自分の意見を500字程度の日本語で論じなさい。ただし、欧文表記等を用いる場合は1マス2字とする。